

編集後記

今年は不順な冷夏のため日常生活、経済の各方面に大きな影響を受けた。しかし秋に入って幾分残暑などもあり、これからの順調な回復が心待ちされるこの頃である。読者の諸氏も常々「胃と腸」を愛読されているいろいろと御意見を伺うこともあるが、一層内容の充実に努力しなければいけないと考えている。

本号は症例・研究特集号で17の論文を収録してある。いずれも興味深いもので、それぞれに苦心のあとが偲ばれる。

「胃と腸」では選択に当たっては珍しい価値のある症例と判断されてもX線、内視鏡の診断面でしっかりした記録写真があり、かつ病理組織面でのしっかりした検索が揃っていないと採用にならないのが通例で、かなり厳しいチェックを受けている。それだけに各論文とも十分吟味されたもので皆さんに御満足いただけるものと考えたい。

内容は食道3例、胃9例、腸5例で、その中で胃の良悪性境界病変に関係する2例が含まれている。胃のいわゆる異型上皮巢は最近では生検を繰り返しつつ経過をみる場合が多いと思うが、いつも心の片すみに不安を感じながら患者に接しているのが実情と思う。この2つの症例報告では、いずれも臨床家側からの判断に対して病理の専門の立場からのコメントがつけられており、臨床家がこのような症例に対処する場合に大変参考になるものと思う。

なお、投稿される症例はX線、内視鏡、病理組織検索のいずれの面からもしっかりした記録のあるものを選んでいただきたいことをお願いしておきたい。

＜城所 侑＞

＜編集＞ 早期胃癌研究会